



# 遠くて近いウズベキスタン

The Republic of Uzbekistan, distant yet so close to Japan

関根正美

SEKINE Masami

日本交通技術株式会社  
海外室/担当課長



ウズベキスタン共和国は、民主主義と市場経済主義に基づく国作りの真っ最中である。しかし、67年間続いた社会主義システムが随所に残る少し異なる世界でもある。そのような環境下で円借款事業に1997年から4年間断続的に従事した。近年は成田へ直行便が就航しており、日本人旅行者も増えているようである。とはいえまだまだなじみのない国であることに変わりはないが、紙面の許す限り紹介したい。

## 1. ウズベキスタン共和国鉄道旅客輸送改善事業

本事業は、ソ連における社会主義体制の終焉によりもたらされた。ソ連邦時代は、素材、中間財、最終製品の分業体制が連邦内共和国間でとられ、鉄道車両でも製造と保守が分業されていた。ウズベキスタン共和国内には、ディーゼル機関車保守工場はあるが、客車保守工場は無く、1991年の独立後は、国外に重修繕を委託してき

た。しかし、外貨不足による委託保守両数の減少と老朽化による廃車を補う調達が困難であったことから、運用可能両数が減少し輸送能力が低下した。

輸送網の整備は、社会経済発展や国際社会への参加の要であるため、同国政府の要請にもとづき、25両の新製客車調達、重修繕能力を持つ客車工場建設、既存客車の補修用部品調達が、旧海外経済協力基金(現国際協力銀行)から61億2百万円、同国政府から20億37百万円の融資により行われた。

訪問前の同国に対する知識といえば、シルクロードの隊商宿、隣接国も海に接していない2重内陸国等限られていた。又、官僚・秘密主義、非効率、無表情というステレオタイプの社会主義のイメージがもたらす不安があった。実際、社会主義システムのなごりは節々に現存しており、特に秘密主義は相当なものがあり、長年続いたら人も変わらざるを得ない、という印象を感じた。しかし、

不安が消えるのに時間はかからなかった。自分達もアジア人であり、努力して日本のような国を作るのだという熱意が、又、日本の技術を取り入れ、同国の現状に合った中央アジアで一番立派な工場を建設するのだ、という強い意気込みが感じられたか



表 - ウズベキスタン共和国の概況

地理	ユーラシア大陸の内側に位置し、国境を北にカザフスタン、東にキルギスタンとタジキスタン、南にアフガニスタンとトルクメニスタンと接する。海に出るまで国境を二回越えねばならない二重内陸国。
面積	447,400km <sup>2</sup> (日本の1.2倍。60%が砂漠、草原、乾燥した土地、10%が耕作面積)
人口 (2001年)	2,506万人 (人口密度46人/km <sup>2</sup> )
首都	タシケント (人口250万人)
気候	顕著な大陸性気候で晴天が多く、昼夜の気温差が大きい。冬はあまり寒くない (1月の平均気温は-3度から+3度)。夏は暑く (7月の平均気温35度) 乾燥 (湿度20%台) している。春と秋は短く温暖。
言語	公用語はウズベク語。ロシア語も話されている
人種	120あまりの民族からなる多民族国家。ウズベク (77.2%)、ロシア (5.2%)、タジク (4.8%)、カザフ (4.0%)、タタール (1.4%)
宗教	イスラム教 (国民の88%、スンニー派が優勢) 東方正教 (9%)
時差	日本より4時間遅い
主要産業	綿花生産、天然ガス、石油、金等
GNP (2000年)	152億ドル (一人当たり620米ドル)

図 - ウズベキスタンとその周辺国 国際地学協会、承認03-04-02



写真1 - 稼働中の客車工場



写真2 - 朝の儀式に集まった人々(大皿がプロフ)



写真3 - 入場後挨拶する新郎新婦

らである。又、事業関係者が友好的、努力家であることにも助けられた。

事業は2001年に完了し、25両の客車はモスクワ行き国際列車に使用されている。客車工場(写真1)は、スタッフが新しい技術や機械にも慣れ、自国車両の整備のみならず近隣諸国からも保守を受託しており順調に稼働している。

## 2. ウズベキスタン人の紹介

挨拶と握手: ウズベキスタンでとても気に入っているのが挨拶である。相手からアッサロマ・レンコン(peace to you)とくるので、ワ・レンコン・アッサロマ(and peace to you)とかえす。とにかく会えば握手、交通警官に止められてもまずは握手から始まる。知り合いになると、右肩と左肩を入れ替えて2回抱き合い、この時背中をポンポンとたたく(ウズベク人は太っていて巨体なので背中に手が届かないことが多い)。さらに親交が増すと抱き合う時に右ほほと左ほほに1回ずつ音がするキスをする。これは西洋人でも人によっては抵抗があるらしく、日本人でこの領域に達することは多分...ないだろう。

人柄: 日本はアジアの同胞、経済発展に成功した国として知られているためか、とても親日的で、人懐っこく、「外人」として変な目で見られることはない。とてもきさくで乗り物で隣り合わせになると自然に話が始まる。初対面であろうと友達の友達であろうと人が集まれば直ぐにぎやかになる。

直接的表現をしないで、遠まわしに言うところは日本人の感覚に似ている。年長者に敬意を払い、人情もある。一方、シルク・ロードの商人の国らしく友達同士のつきあいもギブ・アンド・テイクの面があるようだ。

ウオッカ: 国民の88%がイスラム教の国であるが、社会主義時代の無信教政策のためか、宗教とは関係なく誕生日、クリスマス等機会があるたによく飲む。誰かが

立ち上がり「今日我々がここにこうして集まったことに乾杯」、「皆の健康のために乾杯」等と一言述べた後、ショット・グラスのウオッカを全員で一気に飲み干す。宴が終わるまでに全員が一言述べる習慣があり、その都度一気が繰り返されるのでたいていの日本人は這々の体でホテルにたどり着くことになる。1リッターのウオッカを飲む人も珍しくはないし、女性も相当いけるようである。乾杯の間にコーラや水を飲むことは自由である。ちなみにビールは殆ど飲まない。この地では倒れるまでウオッカを酌み交わせばあっという間に仲良くなれる。太っていること、酒が強いことがよき御仁の条件だそうだ。

結婚: 伝統的なウズベク人社会の結婚は5 - 10%が自由恋愛で、あとはお見合いである。お見合いは気に入らない場合はノーと言える。気に入れば数回デートをすることも、そのまま結婚することもある。平均年齢は男性23 - 24歳、女性18 - 20歳。1カ月程の両家間の協議が済むと婚約の儀となるが、これが結婚にかかわる費用のうち大部分を占める。新婦側は新郎側よりも出費が多いそうだ。新婦側は新婚さんの寝室や時には一緒に暮らす新郎側の家族と共有する部屋の家具を用意し、新郎側は結婚式の費用を負担する。

結婚式の前日に新郎または新婦側の家もしくはモスクで宗教的儀式が行われる。結婚式は、新郎の朝の儀式、新婦の午後の儀式、全員参加の夜の儀式と三部制である。タシケントでは、朝の儀式は5時頃から始まり、plov(プロフ)という米を水と油で蒸し上げたような伝統的米料理がふるまわれる(写真2)。式のハイライトは新郎の家、又は、宴会場で行われる夜の儀式(写真3)。出席者は平均150-200人で(経済的余裕のある場合は数百人にもなる)招待状が配られるが、誰かを伴ってくることも歓迎されるので、一人の招待状に3 - 4人で来ることもある(料理は大皿から取り合って食べるので心配無用)。

男性の招待客は普通お金を送る一方で女性は料理や



写真4 - 運転本数の多い路面電車



写真5 - 中央の串焼きがマトン、左端が主食のナン



写真6 - 布団やさん(中央赤色が敷き布団)

お菓子を持ち寄り皆に提供される。絨毯、花、各種プレゼントを持参する人もいる。男性と女性のテーブルは別々に用意される。伝統的音楽が演奏される中、新郎新婦の入場で式が始まる。「今日はカマロフさん(新郎の父)にとって最も幸せな日です。OOO(組織の名前)を代表して、新郎新婦にお祝いを申し上げますとともに彼らの健康、幸福とたくさんの子供に恵まれますように…」というようなスピーチが音楽の演奏と交互に行われる。ウズベク人はスピーチがとても上手で式場は笑いが絶えず、皆が楽しんでいる。宴が進むと音楽にあわせてダンスが始まる。手に紙幣を握って踊るのだが、お札の行き先は演奏を奏でる音楽家である。式は普通3 - 5時間続くらしい(強烈な酒攻めのため最後までいることは不可能、途中退席も自由なのありがたい)。結婚式は、ウズベク人ですら面白いといえるほど地方によって多様な特色があるようだ。

ことわざ：分かり易い幾つかを紹介する。

- If I say, my tongue will burn, if I do not say, my soul will burn.
- Be silent then your life will be longer.
- Honey is on the tongue, ice is under the tongue.
- Good rope is long, good speech is short.
- One head is head, two heads are gold.
- Lost knife has gold shaft.
- Beauty is necessary at the wedding, love is necessary every day.

### 3. 首都タシケント

ソ連邦時代、その急速な発展ぶりは「中央アジアの奇跡」と賞賛され、中央アジアの政治、文化、科学、工業の中心地として栄えてきた。人口250万人を有し、旧ソ連邦諸国の中では、モスクワ、キエフ、サンクト・ペテルブルクに次いで4番目に大きく、中央アジアでは最大の都市である。

交通事情：路面電車(総延長171km、写真4、2003年2月時点、以下同じ)、トロリーバス(261km)、路線バス

(2,360km)が整備され、中央アジア唯一の地下鉄(3路線36km)が走っている。市内の道路の幅員は見事なまでに広いが舗装状態はあまりよくない。車が少ないため渋滞は無い。95%以上の運転手は、信号を良く守るし、たまには横断歩道でとまったり、進路を譲り合う等交通マナーはよい方である。しかし残り5%程は「事故が起きたら人間の体はどうなるのだろう?」と考えたことはいかなるような挙動で走り回るので、これは恐怖である。高速で直前を横切る、首都高速も顔負けの割り込みやいきなりの進路変更、信号まったく無視等、出来るだけ大型の車に乗るのがよさそうである。

食事情：マトンがお決まりのタンパク源で、その脂肪を調理油として利用している。牛肉と馬肉も好まれる。肉の味は穀物飼料で育ったものと比べると淡泊だが、特にマトンは田舎のものほど味がよい。内陸国のため魚は川魚(鯉のような魚)のみで種類が限られ泥臭いためか、魚料理を提供する店は限られている。塩漬けのニシン、シシャモを市内で一番高価なバザールで見ると食べたことはない。ウズベク料理は特段辛くはなく、セリ類、香菜、ゴマ、ハーブ類などが多く使われ風味豊かな味である。しかし、特別な店を除けば、それらは日本人には隠し味になってしまい、脂ぎって塩味が濃く、三食食べ続けるにはつらい(筆者の場合2週間が限度)。日本食堂は無く、10軒程ある韓国食堂の一部で乾麺を使ったうどんがある程度(出し汁をとり日本醤油を使って...などと期待してはいけません)。日本食品は無く、在留邦人は国外への買出し、日本から空輸等苦労されている。

洋食レストランもあるが、伝統的なチャイハナ(teahouse: 飲食だけでなく、生活や商売に関する大事なことを話し合う場所)を訪ねない手はないのでRisolat Oiya Choyhona(リソラット母さんのチャイハナ、電話490973, Faroby通り, 15, Sobir Rakhimovskiy District, )を紹介したい。リソラット母さんが10年前に始めた噴水の

ある民家の庭を利用した家庭的なチャイハナ。昨年国営テレビで"besh pandjya"シャシリクが紹介された評判の店。夏は青葉が茂る果樹の下、噴水の冷気を感じながら鳥のさえずりをBGMに食事を楽しめる。定まったメニューは無く、ウエイトレスがその日準備された料理を言うのでその中から選ぶ(でも彼女は英語

を話さない)。ある日のメニューは、lagman(塩味のきいた油たっぷりスープの肉うどん)、quails(ウズラー匹丸ごとスープ)、mampar(きし麺スープ)、narin(肉と玉葱入りウズベク麺)、kazan-kabob(羊バラ肉の煮込み)、各種シャシリク(金串に刺したマトン、牛、鶏肉を炭火で焼いたもの)。伝統的な調理方法で手作りされた料理は香料が適度に利いた満足まちがいなしの味である(写真5)。  
バザール：市内には大小さまざまなバザールがあり、市民の買い物のお大半はバザールである。旧市街にあるチョルソー・バザール(190,000m<sup>2</sup>)は、タシケントで2番目の規模。バザールとは、キャラバン・サライが行きかかった時代の通商路に発生し、商人、両替商、職人等が集まり、バザールから町が形成されたそうである。その頃の面影を残しているかどうかはわからないが、とにかく8世紀にはあったという古いバザールである。現在の建物は1996年に建設されたもので、ウズベキスタン各地のバザールの形態が見られる。他のバザールと何が違うのかといえば、売り物、商人、買い物客、車、様々な音で混沌としていることだ。商人は売り物を陳列台、通路、道路、いたるところに並べまくる一方で、他の場所はカラッポだったりする。売り物を客の目に付きやすい出入り口、階段などに並べるからである。「そこ行くだんなさん、朝どり新鮮野菜だよー、こっちが安いよー」と言っているのだろうか売り子が客の気を引こうと大声で呼びかける。往きかう商人、買い物客、買った品々を運ぶ手押し車の間をすり抜けながら進むのだが、背中を押されたり手押し車に当てられたり歩きにくい。肉、野菜、果物、香料、衣料(写真6)等生活必需品は何でもある。果物、乾燥果実や肉の加工品等量り売りの多くは試食でき、商品の前に立つとさっと差し出されるので一回りすれば満腹である(埃とか気にならなければですが)。ちょっと困るのは量り売りの単位が1kgとか0.5kgなので食べきれないこと。正直な売り子もいるが、たいていは値段を吹っか



写真7 - ナボイ劇場



写真8 - 日本人墓地

けるのでなかなか相場では買えない。果物等値切りの結果やっと相場で合意し、自分でいい物を選び目方を量るカゴに入れるのだが、袋に入るまで見ていないと、キズ物と替えられてしまうので油断できない。バザールでは、常に真剣勝負、値切るのが当たり前というところがスーパーマーケットに勝る楽しさである。

ナボイ劇場：第二次大戦後タシケントに拘留された元日本人将兵の強制労働で1947年に建設された市内で最も壮大な外観を誇る三階建て、1,500人収容の建物(写真7)。1966年の大地震では市内の大半のビルや建物が崩壊したが、この劇場は殆ど無傷で災禍をまぬがれ、日本人の仕事は見事であると語り継がれている。ウズベキスタン各地の建築様式をモチーフに見事な彫刻が施されている。ほぼ毎日のようにバレエ、オペラ等が上演されている。

日本人墓地：ウズベキスタンには、現地の人々が墓守をしてきていた元日本人将兵が眠る日本人墓地が13カ所(812柱)ある。タシケントにはフルンゼンの丘に1カ所あり、1990年5月23日に福島県ウズベキスタン文化経済交流協会が中心になって「鎮魂の碑」が建立、併せて墓地が整備された(写真8)。樹木の深い緑の下、フェンスで囲まれた敷地約1,000m<sup>2</sup>に79名の墓標が並ぶ。純白の大理石の墓標には日本語とロシア語で名前が刻まれている。日本から毎年のように墓参団が訪れている。

### 4. あとがき

遠い国ウズベキスタン。その遙かな距離にもかかわらずウズベキスタンと日本の習慣、文化には少なからぬ類似点が見られる。短い滞在でも一度行けばまた訪ねたくなる暖かな雰囲気の落ち着いた国である。社会主義の面影を残している今が所謂イキドキなのかも知れない。